

# *Hamlet*におけるHoratioの役割

## - 友として、歯車として -

13L020 加納 由季

### はじめに

Shakespeareの四大悲劇の一つである*Hamlet*ほど、頻繁に論じられてきた作品はないと高橋、河合は言う。その謎の多さから「文学のモナリザ」「演劇のスフィンクス」とも呼ばれるが、その謎こそ、この作品が多く読者や観客を魅了してきた根拠でもある。<sup>1</sup> 物語の構造、登場人物の描写、台詞の単語一つに至るまで、謎を挙げればきりが無い。

謎多き*Hamlet*の登場人物のうち、最もその正体が掴めないのが、主人公Hamletの友人Horatioである。作品そのものと同じように、彼の持つミステリアスな雰囲気、姿を見る者の心を惹きつける。登場回数はHamletと比較にならないほど少ないが、主人公を支え、助言し、最終的には物語の重要な鍵となるこの登場人物の魅力は、Hamletに負けず劣らずのものだろう。

物語の最終幕、Hamletから託され、生き証人としてデンマークの未来をFortinbrasに引き継ぐ役割を担うHoratioの存在とは、一体どんなものであつただろう。そしてその存在が放つ引力が、*Hamlet*という作品に与えた影響とはどんなものであつただろうか。本稿では、Horatioという人物について多角的な視点から分析を試みた。第一章ではHoratioの人物像について、出自や物語序盤での立ち位置といった観点から考察する。第二章ではHamletとHoratioの友情を他の友人と比較考察し、Horatioに対するHamletの評価や憧れから、なぜHamletがHoratioに信頼を置くようになったかを論じる。第三章では、HoratioがHamletと観客の両方から信頼されているという事実に基づいて、彼の劇における歯車としての役割を「亡霊観」「物語の外部であること」「客観性を持つこと」という三つの視点から考察する。

## 第一章 *Hamlet*で描かれるHoratio

### 1. Horatioの出自

Horatioは、主人公Hamletが通うドイツ・ウィッテンベルク大学の学友であり、学者である。<sup>2</sup> しかし、Horatioについてそれ以上の確固たる情報は作品中にはないと言ってよいだろう。それゆえ、彼の存在は*Hamlet*の中でも特に謎めいている。彼の正体不明さは、その出自によって表現される部分が多い。

五幕二場では“I am more an antique Roman than a Dane.” (5. 2. 343)<sup>3</sup> とHoratioが

言っており、彼がデンマーク人であることは自明である。しかし、そのような台詞があるにもかかわらずHoratioの出自には矛盾がある。後藤は、Horatioの出自について次のように述べている。一幕一場で国が戦力を増強しているのは何故かと問うMarcellusに対して、Horatioはデンマークの政治的状况を説明してみせる。これを見れば、Horatioがデンマーク人であると言うことができるだろう。しかし一幕四場のシーンでは、デンマーク人であることが疑わしく思われるやりとりが交わされる。Claudiusが催す盛大な宴の音を聞いて、Horatioは“*What does this mean, my lord?*” (1. 4. 7) と尋ね、Hamletはこれが昔からの慣習であると答える。Horatioがデンマーク人であれば、国の慣習について知らないのは不自然である。<sup>4</sup>

また三幕二場では、Hamletが“*…That no revenue hast but thy good spirits/To feed and clothe thee? Why should the poor be flatter'd?*” (3. 2. 57) とHoratioを評することから、彼が貧しい身分の生まれであることがわかる。Rosencrantz、GuildensternがHamletと共に王宮で育った仲であることから貴族の御曹司であることがわかるのに対して、Horatioの立場に関してわかるのは、RosencrantzとGuildensternに比べてHamletとの地位に大きな差があるということである。

ここで疑問となるのが、貧しい身分であるという事実とは相反する彼の行動の数々である。Horatioは貧乏人でありながら、宮廷に出入りすることができ、Marcellusをはじめとする歩哨らと親しくすることができる人物だということになる。Hamletの導きがあったとすればこの行動にも理由が見つかるが、先王の葬儀に参列するためデンマークにやってきたHoratioとHamletは一幕二場で初めて顔を合わせているから、そのような経緯はなかったはずである。さらに言えば、第一独白での“*But two months dead!*” (1. 2. 138) というHamletの台詞からもわかるように先王の死からは二ヶ月が経っており、その間HamletがHoratioと一度も会っていないのは不思議である。

また四幕五場では、HoratioはGertrudeとClaudiusにも対面している。五幕一場では“*I pray thee, good Horatio, wait upon him.*” (5. 1. 288) とClaudiusに声をかけられており、Horatioの存在が王と王妃に認められていたことがわかる。しかし、王と王妃がいつHoratioを知ったのかは不明である。

こうしたHoratioの行動はあいまいで矛盾をはらんでおり、出自と合わせて彼の存在の不確かさを物語る要因となる。しかし、Hamletは正体不明のHoratioと友情を結び、最後にはその手にデンマークの未来を託す。この友情は一体どんなものであったのだろうか。

## 2. Hamletとの友情

Hamletからデンマークの未来を預かることになるほど、物語後半、HamletとHoratioの友情は疑うことのできないものとなるが、Draperは、HamletとHoratioが第一幕の時点ではそれほど親しい仲ではなかったのではないかと考えた。Hamletが相手に呼びかける“*thou*”と“*you*”の使い分けが、それを示す証拠であるとしている。<sup>5</sup> “*thou*”は親しみを込めて使われ、“*you*”はよりフォーマルな場面で使われる二人称である。“*thou*”と“*you*”の使い分けにつ

いて、HoratioとHamletの他の友人とを比較する。

まず、Hamletの信頼を得、彼の右腕として共に行動するHoratioとは対照的なHamletの友人として登場するRosencrantz、Guildensternについてである。二幕二場でRosencrantzとGuildensternが王宮に姿を現した時、Hamletは“My excellent good friends! How dost thou, Guildenstern? Ah, Rosencrantz!” (2. 2. 221-222) と、いかにも懐かしそうに応答する。この時点では、二人はHamletにとって親しむべき幼友達であり、Hamletは久しぶりの再会を訝しむことはない。しかし、二人がClaudiusに呼ばれて自分の様子を探りにきたのだと気づくと、敬遠的な“you”ばかりを使って態度が冷やかになる。これ以降、Hamletと彼らの間に親密さは感じとれなくなってしまう。ついには三幕二場で“My lord, you once did love me.” (3. 2. 331) とRosencrantzに言わせるほどHamletの対応は冷たく変わるのである。

これに対し、Horatioは初めはよそよそしかったHamletと親密の度を増していくことになる。Hamletは第一幕でHoratioに“you”を使うが、第三幕では“thou”を使い彼の人となりを褒めさえする。対するHoratioは第一幕ではHamletに対し“my lord”と呼びかけるが、第三幕では“sweet lord”、“my dear lord”と呼び方を変えている。となれば、第二幕の間に二人の関係を変える何らかの出来事が起こったと考えられる。二章で、Hamletの側に起こった出来事とそれによって生じた変化について考察し、HamletがHoratioを信頼していったと考えられる過程について論じる。

## 第二章 Hamletの友としてのHoratio

### 1. RosencrantzとGuildensternとの比較

HamletのHoratioへの態度が好転したのには、第二幕で起こったHamletとRosencrantz、Guildensternの再会が原因となっていると考えられる。なぜなら第二幕にHoratioは登場せず、彼とHamletとのやりとりをうかがい知ることはできないからだ。Rosencrantzらとの会話の中に、Horatioを信頼するようになるHamletの心の変化が隠されている。二幕二場でのRosencrantzらとの再会の場面を参考にしながら、その変化を追ってみたい。

次に引用するのは、HamletとRosencrantzらの再会のシーンのやりとりである。

Hamlet. What news?

Rosencrantz. None, my lord, but that the world's grown honest.

Hamlet. Then is doomsday near. But your news is not true. . .

(2. 2. 234-237)

ここでRosencrantzは、世界が誠実になったと口にする。これは、Claudiusの治世になり世の中がより善良になった、つまりClaudiusが王になったことを是とするRosencrantzらの立ち位置を表す一言である。対してHamletは一幕五場の最後で、“The time is out of joint.” (1. 5.

188) と世界の無情を嘆く。さらにHamletは二幕二場の上記引用の直後、“Denmark’s a prison” (2. 2. 241) と言って、Claudiusが父を殺害し、母を奪ったことで自分にとって牢獄となった世界を表現する。しかし彼のこの叫びのような台詞は、Rosencrantzによって “We think not so, my lord.” (2. 2. 246) と一蹴される。Hamletは一幕から通してClaudiusへの不快感を示しており、HamletとRosencrantzらの世界の見方に対する対立した二つの考えは相容れず、Hamletは彼らを疑い、避けることとなる。

Hamlet. . . . But, in the beaten way of friendship, what make you at  
Elsinore?

Rosencrantz. To visit you, my lord ; no other occasion.

(2. 2. 268-269)

さらに、二人はClaudiusに呼び出されたにも関わらず、それを隠してHamletに会いに来たと告げる。彼らはHamletに対して、再会してすぐに嘘をつくことになり、Claudiusが国を治めていることへの意見の相違を感じたHamletは、その嘘に気づく。こうして、幼友達であり、好意を持って再会したはずのRosencrantz、Guildensternに対する心の変化があったことがわかる。

Hamletが第二幕でHoratioを信頼するようになるためには、その前に描かれたHoratioとの再会のシーンも合わせて重要になる。Rosencrantzらに対する信用が失われたとしても、第一幕でHoratioも同じように信用を失墜させるような言動を取っていたら、Hamletの理解者は生まれなからである。

一幕二場で、HoratioはHamletに対する誠実さを見せる。次に引用するのは、HoratioがHamletと最初に再会するシーンである。

Hamlet. But what is your affair in Elsinore?

.....

Horatio. My lord, I came to see your father’s funeral.

Hamlet. I prithee do not mock me, fellow-student;

I think it was to see my mother’s wedding.

Horatio. Indeed, my lord, it followed hard upon.

(1. 2. 174-179)

一幕二場の時点で、Hamletの最大の関心事が父の死とそれに続く母の結婚であることは明確である。エルシノアへ来た理由を問われたHoratioは、Hamletにとって最も重要な出来事であるHamlet王の葬儀を拝観するために、デンマークへやってきたことを告げる。そこでHamletは、母の結婚式を観に来たのだらうと茶化すが、Horatioはその言葉に隠されたHamletの思いを汲み取った返答をする。つまり、Horatioは母の結婚が父の葬式から間を置かずに行われたことについてHamletが心を痛めていると察し、その意見に同意しているのである。

Queen. If it be,  
Why seems it so particular with thee?  
Hamlet. Seems, madam? Nay, it is; I know not seems.

.....

King. But to persever  
In obstinate condolement is a course  
Of impious stubbornness; 'tis unmanly grief;  
It shows a will most incorrect to heaven,  
A heart unfortified, a mind impatient,  
An understanding simple and unschool'd;

(1. 2. 92-97)

直前のシーンで、HamletはClaudiusとGertrudeから自身の悲しみを否定されている。それにより、HoratioはHamletの苦痛を初めて受け入れた人物として、読者の印象に残ることになる。

これを受けて、前述した二幕二場でのRosencrantzらとのシーンにおける「デンマークは監獄である」とするHamletの嘆きを、RosencrantzとGuildensternは“*We think not so, my lord.*”と相手にしないことに再び注目したい。すでに一幕二場でHoratioとHamletとの会話を目にした読者は、もしこの会話の相手がHoratioであるならば、デンマークは監獄であると言うHamletの心に寄り添った返答をするのでは、と感じるだろう。

Horatioと、Rosencrantz、Guildensternの会話を比較してみると、RosencrantzとGuildensternの不誠実さのために、Horatioの誠実さがより強調されていることがわかる。これにより、HoratioはHamletの信頼だけではなく、読者の信用をも得ることになる。こうして、Hamletの物語においてHoratioの信頼性が確立されるのである。

## 2. Hamletの憧れ

二幕二場でRosencrantzらに失望し、Horatioを唯一の友とするようになったHamletがHoratioを評価する場面が三幕二場にある。

Hamlet. Horatio, thou art e'en as just a man  
As e'er my conversation cop'd withal.

(3. 2. 52-53)

HamletはHoratioを“just”であると評している。“just”という語には、「公正な」「高潔な」「正確な」といった意味があり、ネイティブな英語話者であればこれらの意味がすべて同時に頭に浮かぶことであろう。本稿ではその事実を念頭に入れた上で、いくつかある“just”の意味の

中から一つの意味だけを選び取るのではなく、その語の持つすべての意味を内包する性質をHoratioが持っていると考えたい。同時に複数の肯定的な意味が想像される語をHoratioの評価としてHamletが選んだことは、Horatioがそれらすべての意味を持つ人物であるという証として見ることができる。

杵掛は、「並外れて教養高く、有能、温和、献身的かつ愉快で機知に富む」人物が、エラスムスの説いた理想化されたルネサンスの人間像であるとしている。<sup>6</sup> 学者であるHoratioはもちろん教養があるし、五幕二場でHamletと話している間も周囲に気を配りOsricの登場に気づくなど、王子のそばにいる人間として非常に有能である。Hamletを至上とし、助ける姿は献身的で、デンマーク来訪の理由を問われた際の“A truant disposition, good my lord.”(1. 2. 169)という台詞からはユーモアを感じる。まさにHoratioは、理想的なルネサンスの人間であったことがわかる。“just”という語に内包されるすべての意味をもってしてもなお余りあるHoratioの魅力が、Hamletによる評価から伝わるのである。

ここで注意して見ておきたいのは、HamletのHoratioへの信頼をより深いものにしたのがRosencrantzらの失態だけではないということである。Horatioを“just”と評した後、Hamletは次のようにHoratioを認める理由を述べる。

Hamlet. Since my dear soul was mistress of her choice  
And could of men distinguish her election,  
Sh'hath seal'd thee for herself ;

(3. 2. 61-63)

心が自分で物事を選び抜く力を持ち、人を見る目が備わってから、君こそわが心の友と思い定めてきた<sup>7</sup>、というHamletの台詞だが、「人を見る目が備わった」のは一体いつのことだろうか。Hamletは、第一幕でHoratioに対し“you”を使い、それほど親しい仲ではなかったことを示している。「心の友」と思ふような相手に、そのようなよそよそしい態度を取るとは考えにくい。となれば、Hamletが人を正しく評価できるようになったと認識しているのは、父の死後、自分を取り巻く様々な人間の真実の顔を知ることになってからと考えられる。人間が持っている他者には見せない汚れた部分を知ることによって人を見る目が備わったと感じたHamletは、叔父だけでなく母までも信じることができなくなる。

しかし、父が亡くなってから二ヶ月はHoratioと会っておらず、HamletのHoratioに対する印象は以前と変わっていなかったであろうことが想像できる。第一幕の時点での、あまり親しそうには見えない態度がその証拠となる。では、Hamletの「人を見る目が備わった」原因が、父の死後にもう一つあるのではないだろうか。

それは、亡霊と出会うことで経験する二度目の父の死である。一幕五場で亡霊と対面し、父の死の真相を知ることによって、Hamletは父が死んだことを再度突きつけられる。

Hamlet. Yea, from the table of my memory

I'll wipe away all trivial fond records,  
All saws of books, all forms, all pressures past,  
That youth and observation copied there,  
.....  
My table — meet it is I set it down  
That one may smile, and smile, and be a villain ;

( 1 . 5 . 98-101, 107-108)

一幕五場でHamletは、それまでの記憶はすべて消し、記憶の手帳には亡霊の言葉と人々が悪人であることを刻みつけておこうと言う。これは叔父に対して抱いていた不信感が現実のものとなり、彼の人を判断する目がより一層厳しくなったことを示している。そのような経緯があり、HamletはHoratioの公正で、高潔で、正確な性格を認めるようになる。先王の葬儀を拝観しにはるばるデンマークまでやってくるくらいであるから、学友であるHoratioの人となりをHamletがまったく知らないということはあるまい。これまであまり親しく思っていなかった友人の性質が、信じられなくなった周囲の人間の中でひとときわ善良に見えた可能性が考えられる。

そして、亡霊となった父の姿を見たことで二度目の父の死を経験したHamletは、父を失ったという実感を強くした。憧れの対象となる人物が死んでしまったのである。高山は、Hamletは感情に身を任せて行動する情熱を持っているが、しばしばその情熱を抑えることができないと論じている。三幕四場で壁掛けの背後にいたPoloniusを殺した場面や、五幕一場でのLaertesとの取っ組み合いが例である。Hamletはそんな自分自身を“passion's slave” (3 . 2 . 70) であると言う。対してHoratioは学者であり、冷静に物事を判断する性質を持っている。

Hamlet. Since my dear soul was mistress of her choice  
And could of men distinguish her election,  
Sh' hath seal'd thee for herself ; for thou hast been  
As one, in suff'ring all, that suffers nothing ;  
A man that Fortune's buffets and rewards  
Hast ta'en with equal thanks ; and blest are those  
Whose blood and judgment are so well comeddled  
That they are not a pipe for Fortune's finger  
To sound what stop she please. Give me that man  
That is not passion's slave, and I will wear him  
In my heart's core, ay, in my heart of heart,  
As I do thee.

( 3 . 2 . 63-72)

Horatioを評したこの台詞が、そのことを物語っている。Hamletは自分の情熱的な特性から抜

け切れず、感情のうっ積に悩まされているため、逆の性質を持つ人間を無意識に求めている。感情が優勢なHamletが、理性の勝るHoratioに憧れを持ったとしても不思議ではない。<sup>8</sup> またその憧れが、今は亡き父の代わりに向けられたものであるのも想像できる。

“just”であるHoratioに憧れたHamletは、彼を自分亡き後、デンマークの未来を託すに足る人物であると判断した。王位を継ぐのはFortinbrasだが、Hamletの遺志を伝えるのは他ならぬHoratioである。Horatioの信頼性が確立される、二つ目の要因である。

こうして生まれたHoratioへの信頼が、物語の構造上必要となる部品の一つとしてのHoratioの存在を可能にする。三章では、Horatioの劇構造における存在や機能について論じる。

### 第三章 劇を動かす歯車としてのHoratio

#### 1. Horatioの亡霊観

HamletとHoratioの通うウィッテンベルク大学は、かつてマルティン・ルターが学び、教鞭を取った大学である<sup>9</sup>ことから、彼らがプロテスタントの教育を受けていたことがわかる。カトリックでは亡霊の存在を認めるが、プロテスタントではそれを認めず、悪魔の見せる幻影であるとする考え方がある。十六世紀のイギリスはカトリックとプロテスタント、それぞれを信仰する治世者の交代によって宗教観が揺れ動いていた。<sup>10</sup> その影響を受けてか、作中でもカトリック的な亡霊の見方とプロテスタント的な亡霊の見方の両方を見ることができる。特にHamletはカトリックとプロテスタント、双方の視点を持って亡霊に対峙する。対してHoratioは、典型的なプロテスタントの視点で亡霊に向きあう。

Horatio. What if it tempt you toward the flood, my lord,  
Or to the dreadful summit of the cliff  
That beetles o'er his base into the sea,  
And there assume some other horrible form,  
Which might deprive your sovereignty of reason  
And draw you into madness?

(1. 4. 69-74)

ここでHoratioは、亡霊がHamletを死へいざなう悪魔であるという可能性を口にしている。亡霊とは悪魔の見せる幻影であるとするプロテスタントの考えが、ここに現れている。

また、亡霊が悪魔であるとする見方に加えて、亡霊そのものの存在に否定的であるという点についても、Horatioのプロテスタントの特徴と言えるだろう。軍人で、哲学や神学とは無縁であるMarcellusやBernardoは、亡霊は地上に帰ってくることができるとする宗教改革以前の一般の民間伝承や信仰を代弁しているため、亡霊の存在を疑うことはない。<sup>11</sup> しかしHoratioは、一幕一場で亡霊と話すために連れてこられたにもかかわらず、その存在を信じようとはしない。彼は亡



霊を見たと言うMarcellusらの言葉に耳を貸さず、“Tush, tush, ‘twill not appear.” (1. 1. 29) と一蹴する。実際に亡霊と対面し、その姿を先王のようであったと認めてさえ、亡霊に対して“illusion” (1. 1. 127) と呼びかける姿勢は、亡霊をすぐに信じたHamletやMarcellusらとは明らかに違うものであるということがわかる。先述したように、宗教観が揺れ動いていた当時の観客は、亡霊を信じるカトリック的な見方と、否定するプロテスタント的な見方、両方の考え方を持っていたに違いない。Horatioが亡霊に対し懐疑的な見解を持ちながら、その存在を受け入れていくことによって、観客は亡霊の存在に確信を持ち、物語に共感を覚えることができたであろう。

Horatioと亡霊との関係について見逃すことができないのが、一幕二場においてHoratioとHamletが亡霊について話す場面での言葉選びである。一幕一場で亡霊を見たHoratioはそれをHamletに報告することになるが、ここで彼の使う言葉に注目したい。

Horatio. My lord, I think I saw him yester-night.

Hamlet. Saw who?

Horatio. My lord, the King your father.

(1. 2. 189-191)

この時点で、亡霊は先王の姿をしているというだけで本人の魂であるかどうかは不明である。にもかかわらず、Horatioは父の話をするHamletに対して、その姿を昨夜見たように思うと告げる。つまり、「亡霊を見た」と言うのではなく「Hamletの父を見た」と報告するのである。さらにHoratioは次のように先王の姿をした亡霊を描写する。

Horatio. I knew your father,

These hands are not more like.

(1. 2. 211-212)

この両手が似ている以上にそっくりであったとするHoratioの台詞は、亡霊が先王の魂であることをHamletに強く意識させることになる。そしてHamletに亡霊の姿の詳細を問われると、“It was, as I have seen it in his life,” (1. 2. 240) と生前と同じであったと証言する。さらにHoratioは、“The apparition comes.” (1. 2. 211) と、先王の姿をしたものが亡霊であると言う。このように表現されれば、Hamletがこの直後“My father’s spirit in arms!” (1. 2. 254) と、まだ実物を見ていないにもかかわらず、現れた亡霊と父の魂とを結びつけて考えるのも無理はない。

亡霊に関するHoratioのこの発言から読み取れるのは、Hamletに父の亡霊へと向かわせる動機づけを行うために、彼がこの台詞を言ったのではないか、ということである。すなわち、Horatioが物語を動かす歯車として作品に登場しているということである。歯車とは、そのかみ合わせによって一方の軸から他方の軸に動力を伝える装置のことである。<sup>12</sup> Horatioという歯車

が、Hamletという存在にかみ合い、彼を動かしていくことで物語は進んでいく。物語冒頭でHoratioがMarcellusらに呼ばれなければ、あるいはHoratioがHamletに亡霊のことを伝えなければ、*Hamlet*という物語は始まっていなかったのである。

このような台詞をHoratioというキャラクターがそのキャラクターらしい発言として口にした言葉ではなく、Shakespeareが物語をより円滑に進ませるために言わせた言葉だと考えれば、Horatioの発言がその先の展開を予言するようなものであったとしても納得がいく。Horatioの設定や発言に見られる矛盾の数々は、Shakespeareが物語を動かす歯車としての機能を持たせたことで生まれたものであると言えるのである。

## 2. 物語の外部としての機能

Dover Wilsonは、Horatioは現実世界の人間ではなく、小説の中の人物でもなく、劇という構造の中の一片であると説明する。<sup>13</sup> そうであれば、一章一節で述べたように、Horatioの設定に謎や矛盾が多いことにも納得がいく。HoratioはHamletの友人であり、その思いを受け止める人物であると同時に、物語を動かしていくための役割を持ったある意味での作者の駒として存在しているということになる。

Horatioが物語の外部にいたことが、よくわかるシーンがある。一幕一場、先王の亡霊を見た彼は、その姿を次のように描写する。

Horatio. Such was the very armour he had on  
When he the ambitious Norway combated;  
So frown'd he once when, in an angry parle,  
He smote the sledded Polacks on the ice.  
(1. 1. 60-63)

まるで、その場で見ていたかのような口ぶりである。五幕一場で、何年前から墓堀をしているか尋ねられた墓堀人夫が“Of all the days i' th' year, I came to't that day that our last King Hamlet overcome Fortinbras.” (5. 1. 139-138)、“I have been sexton here, man and boy, thirty years.” (5. 1. 155-156)と答えるように、先王HamletがFortinbrasを打倒したのは三十年前のことである。Hamletはそれと時を同じくして生まれているため、もしもHoratioがFortinbras打倒を目の当たりにしていたとすれば、Hamletより年齢が上であることになり、ふたりが学友であるという設定からも外れてしまう。ゆえにこの状況説明は、ギリシア劇におけるコロスのような役割を示していると考えられる。四幕七場で、Opheliaの死の様子を報告するGertrudeも同じようにコロスの役割を果たすが、彼女のそうしたシーンは一度きりであり、Gertrudeという登場人物が物語の説明役を担っているとする理由にはならない。しかしHoratioは、一幕一場でデンマークの状況を観客に知らせる役目を負ったり、亡霊の姿を自分が生まれていない時代のもものと重ねて表現したりと、舞台上には現れない事象の説明を行う役目を担っている。

また、劇のエンディングを観客に想起させるため、Horatioが落とした一つの台詞がある。亡霊と最初に対面した直後、Qのみにある台詞である。

Horatio. And even the like precurse of fear'd events,  
As harbingers preceding still the fates  
And prologue to the omen coming on,  
Have heaven and earth together demonstrated  
Unto our climatures and countrymen.

(1. 1. 121-125)

ここでは“precurse,” “harbingers,” “preceding,” “prologue”と、四つもの「予兆」「前兆」を意味する語が登場する。この直前の会話はFortinbrasの襲来に備えた軍備増強についてのものであり、ここで言われる“omen”とは、Fortinbrasとの間に戦が行われるということを指していると思われる。しかし、ひとたび*Hamlet*という作品の結末を知ってしまえば、Horatioが言う「予兆」が、五幕二場で、登場人物が皆死んでしまう悲劇が起こることの予言であったことに気づく。Horatioは、劇が始まった直後に、その結末を暗示する役目を背負っている。「予兆」という言葉を聞いて観客の心に生まれる不安が、物語のエンディングをさらに盛り上げるのである。Horatioがいることで物語が円滑に進み、物語への期待が高まることになる。

### 3. 客観性を持つ存在

前述したように、Horatioは物語の詳細な情報の説明役として舞台の上に立つだけではなく、Hamletの唯一の友としてその役目を全うする。HoratioがHamletの友であることは、Hamletの心を支え、復讐の手助けをすることも役割として含まれるが、もう一つの作用として、物語に客観性を与える役割も担っていると高山は言う。

Hamlet. Does it not, think thee, stand me now upon —  
He that hath kill'd my king and whor'd my mother ;  
Popp'd in between th' election and my hopes ;  
Thrown out his angle for my proper life,  
And with such coz'nage — It's not perfect conscience  
To quit him with this arm? And Is't not to be damn'd  
To let this canker of our nature come  
In further evil?

(5. 2. 63-70)

五幕二場でHamletは、Claudiusを殺して仇を討つことは正しく、むしろClaudiusのような罪人を放置するのは罪だとHoratioに主張する。Hamletは、Horatioならこのことを認めてくれると思ったのである。これは二章で論じたように、HamletのHoratioへの信頼がなせるものである。Hamletは、Horatioが認めてくれさえすれば、復讐に客観的な道理が生まれると考えたのである。

この直前の会話では、Hamletがどのようにしてイングランド行きの船から脱し、デンマークに帰ってきたかを語っている。これをHoratioが聞くことによって、Hamletの身に起こった出来事が、事実としての客観性を帯びてくる。

また、復讐のきっかけとなった亡霊との会話でも、Horatioの客観性は活かされる。一幕一場で亡霊を見たHoratioは、“Before my God, I might not this believe/Without the sensible and true avouch/Of mine own eyes.”（1. 1. 56-58）と、亡霊に対し懐疑的だった姿勢を崩し、その存在を認め始める。Horatioが認めることで、先王の亡霊が単なる幻覚ではなく客観的に存在するものであることを観客は納得させられる。

五幕二場、劇の最終の場面で、その客観性はより輝きを増す。Hamletは死に、Horatioだけが生き残る。Hamletの遺言に従い、Horatioは王子の物語を伝え、Fortinbrasをデンマークの王にするのである。Horatioをここに登場させることで、劇の立会人としてHoratioが語ったHamletのことが、観客に客観的に伝えられることになる。<sup>14</sup>

高山は以上のようにHoratioの客観性について論じているが、とすれば、*Hamlet*という作品は、ShakespeareがHoratioを書き手として想定し、描いた物語なのではないか、という推測が頭に浮かぶ。つまり、*Hamlet*はHoratioが王子の伝記として綴った物語である、という設定の下で描かれたものなのではないだろうか、ということである。そうであれば、Hamletの生き様をより鮮明に描こうとしたHoratioが、自分自身の影をできるだけ薄くするため、出身や年齢、地位などを描写しなかったと考えることもできる。

Horatio自身が作者だとするなら、三幕二場でのHamletからのほめ言葉を書き記すことはいささか自分に都合がよすぎるような気がするが、最後にHoratioが生き残り、Hamletの遺言を受け取る役目を考えれば、王子との関わりの深さを残しておくことは必要と言えるかもしれない。Horatioを*Hamlet*の作者であるとするすることで、作品内で起こった多くの謎、つまりShakespeareが作りだしたHoratioについての矛盾を説明できるのである。

## おわりに

*Hamlet*の謎多き登場人物、Horatioについて、不確かな出自、Hamletとの友情、物語を動かす歯車としての存在の三つの観点から論じた。HoratioがHamletの信頼できる友となり、観客にとっても信頼できる存在となっていく過程を追った上で、Horatioへの信頼性が彼を客観的な語り手として成立させたことについて論じた。Horatioが認めるものは亡霊であれ、舞台上には現れないHamletの行動であれ、客観的に存在するものとなるのである。

Shakespeareは物語を動かす歯車として機能させるため、Horatioを創造したと考えられる。

前半では状況説明を行う解説者、後半ではHamletのよき理解者となるHoratioの存在が、Hamlet自身と作品*Hamlet*を前へと進めていくのである。

さらに本稿では、*Hamlet*という作品がHoratioによって書かれたものではないかと推測した。*Hamlet*はHoratioによって書かれたという設定の下、Shakespeareが作った物語であるという見解である。それにより、作中に見られるHoratioの矛盾の数々についても説明することができるという二重の構造を提示した。

Horatioは謎多き人物ではあるが、Hamletの対極にある存在として、Hamletの存在を浮き彫りにする重要なキャラクターとして、作品に欠かすことのできない人物である。*Hamlet*という作品は、HoratioとHamletという、相反する性質を持った二人の人間を並べることで、互いの本質を映し出している。Horatioを描くことでHamletを描き、Hamletを描くことでHoratioを描く。Hamletのために生き、Hamletの遺志を継いだ者として、これ以上の幸せはHoratioにはないのではないだろうか。

本稿では、Horatioの存在について一定の見解を示した。しかし、作品を読めば読むほど、Horatioについての謎は深まっていく。彼について書かれた文献のどれもが、真実であるようにも、真実に見えるだけのようにも思われる。掴んだと思ったら手のひらをすり抜けていき、いつまでも捕まえることができないのは、Horatioも、*Hamlet*という作品そのものも同じである。Hamletの今際の際まで寄り添ったHoratioのように、Horatioという人物に惹かれた人間は、自らの人生が終わる時まで彼に寄り添い、彼について考え続けるに違いない。それだけの魅力が、作品*Hamlet*とHoratioにはあるのである。

---

## 註

- 1 シェイクスピア、ウィリアム、高橋康也、河合祥一郎編注、『<大修館シェイクスピア双書>ハムレット』、大修館書店、2001年、29。
- 2 シェイクスピア、ウィリアム、高橋康也、河合祥一郎編注、『<大修館シェイクスピア双書>ハムレット』、大修館書店、2001年、1. 1. 42。
- 3 本稿の引用は断りがない限り、高橋康也、河合祥一郎編注、『<大修館シェイクスピア双書>ハムレット』によるものとする。
- 4 後藤武士、『ハムレット研究』、研究社出版、1991年、296-297。
- 5 同上、300-301。
- 6 香掛良彦、『エラスムス 人文主義の王者』、岩波書店、2014年、186-187。
- 7 シェイクスピア、ウィリアム、河合祥一郎訳、『新訳 ハムレット』、角川書店、2003年、108。
- 8 高山浩子、『HamletとHoratio』、『共栄学園短期大学研究紀要』、1992年、38-40。
- 9 「ウィッテンベルク」、『ブリタニカ国際大百科事典』、ティビーエス・ブリタニカ。
- 10 NHKテキストビュー「『ハムレット』が内包する宗教問題」<http://textview.jp/post/culture/18234> (2016年12月30日閲覧)
- 11 後藤、97。
- 12 「歯車」、広辞苑第六版、岩波書店。
- 13 児玉直起、『内面と超越——*Hamlet*におけるHoratioの位相』、『日本大学英文学会 英文学論叢』、1988年、32。
- 14 高山、40-42。

---

#### 参考文献

シェイクスピア、ウィリアム、高橋康也、河合祥一郎編注、『<大修館シェイクスピア双書>ハムレット』、大修館書店、2001年。

後藤武士、『ハムレット研究』、研究社出版、1991年。

杵掛良彦、『エラスムス 人文主義の王者』、岩波書店、2014年。

高山浩子、「HamletとHoratio」、『共栄学園短期大学研究紀要』、1992年。

児玉直起、「内面と超越——*Hamlet*におけるHoratioの位相」、『日本大学英文学会 英文学論叢』、1988年。

シェイクスピア、ウィリアム、本田顕彰訳、『ハムレット』、角川書店、1951年。

シェイクスピア、ウィリアム、福田恆存訳、『ハムレット』、新潮社、1967年。

シェイクスピア、ウィリアム、木下順二訳、『ハムレット』、講談社、1971年。

シェイクスピア、ウィリアム、河合祥一郎訳、『新訳 ハムレット』、角川書店、2003年。

#### 参考URL

NHKテキストビュー 「『ハムレット』が内包する宗教問題」<http://textview.jp/post/culture/18234> (2016年12月30日閲覧)

(卒業論文指導教員 金山 愛子)

# The Role of Horatio in *Hamlet*

## —As a Friend and a Gearwheel of the Story—

In my opinion, Horatio in *Hamlet* is the writer of Hamlet's story. In this thesis, I will discuss the character and the function of Horatio to support the idea that *Hamlet* was written from Horatio's perspective. Horatio has two roles as a friend of Hamlet and a piece of structure of *Hamlet*.

Although he is a friend, we are uncertain of Horatio's birth and class. Horatio is a friend from Wittenberg University and a scholar, and yet, there is no certain information about him in the story. In Act II, he grows to be Hamlet's trustworthy friend in the story. At the same time, he becomes a trustworthy teller of the story. Hamlet comes to trust Horatio because he touches Horatio's honesty, and thus, the audience are led to trust Horatio, too. Horatio who becomes Hamlet's confidant accepts Hamlet's uncertain stories and the story of the ghost. Therefore, these stories become "facts" for the audience.

As a gearwheel of the story, Horatio is outside of the plot and he somehow moves the story. Horatio plays the role like the Chorus because Horatio tells stories what the audience have not seen and provides information. This role depends on Hamlet's confidence in Horatio. If we hypothesize that Horatio was the writer of *Hamlet*, we can explain the uncertainty of his character and the growing friendship between Hamlet and Horatio.